

書評

岡本裕一朗著

『異議あり！生命・環境倫理学』（ナカニシヤ出版、2003年）

本書は、好戦的なタイトルとは裏腹に、ある意味でなかなかよくできた生命倫理学と環境倫理学（著者にならって生命・環境倫理学という言い方を利用する）への入門書である。

まず、序章で著者自身の言うところの本書全体の問題設定を確認しておこう。本書冒頭で著者は、生命・環境倫理学を含む応用倫理学全般について、新しい論点がない、現実に対応できていない、現実に対応するときには単なる常識論になる、というような診断を下す（わたしも「応用倫理学」というカテゴリーで日本で出版される本や論文の多くにこの診断があてはまるという点では著者と同意見である）。これらの理由から応用倫理学は「終わっているのではないか」と著者は言い、それが本当かどうか判断するための「材料を提供する」のが本書の目的だと言う（15ページ）。わたしの読み間違いでなければ、これが本書の目的のはずである。しかし、以下の各章で実際に著者がやっている作業は、生命・環境倫理学の主要なテーマについて論争を呼んだ古典的な議論を紹介し、自分自身の見解（しかもかなりの極論）を提示する、というものである。言い換えれば、本書の本体での議論は、生命・環境倫理学に非常に内在的な議論に終始しているのである。これは、もしも著者が額面通りの目的を持っているのであれば、控えめに言っても目的と手段があまりにも食い違っている。最近の研究については他の本に譲る（16ページ）と著者は言うが、生命・環境倫理学が現状で「終わっている」かどうか判断するために見るべき情報はまさに議論の現状、すなわち最近の論点であるはずである。クローンや人間中心主義については額面上の目的に添った論点もあるが、著者が批判する傾向に反対する論者が生命・環境倫理学の中にいることは、なによりも著者自身が引用する文献によって明らかである。

そうすると、著者の意図は別のところにあるのではないかと疑いたくってくる。そして実際、こうした古典的な議論や極端な議論を提示することは、読者に思わず反論したい気をおこさせ、いわば読者を論争のまっただ中に導くことになる。とすれば、著者の真の意図はそこにあると考え

るのが妥当だろう。すなわち、目をひくタイトルで読者を引きつけ、とりあえず読ませて、生命・環境倫理学の中心まで導く。あとは巻末の文献ガイドを頼りに新しい論点を自分で学んでいってください、というわけである（この文献ガイドも文献の選択になかなか配慮が行き届いている）。著者の議論がかなり荒っぽいのも、反論を誘発しやすくして読者を巻き込む戦略だと考えれば納得がいく。

ただ、本書の意図をこのように読み替えるとしても、著者の表面上の問題設定には妙なところがあるので苦言を呈しておこう。「生命倫理学」が常識論ばかり言う、とか「環境倫理学」は批判にどう答えるのか、といった表現が本書では繰り返されるが、これは（著者の愛用する言い方を使えば）「カテゴリーミステイク」であり、ある問題について論じる分野と、その分野における主流の立場を混同している（分かりやすい例で言うと、ある公園で遊んでいる人の大半が野球をやっているからといって「公園が野球をやっている」という表現がおかしいのと同じである）。言い方として変だというだけでなく、この言い方をしてしまうと、これらの分野における反主流派（たとえば生命倫理学における功利主義者や環境倫理学における人間中心主義者）は生命・環境倫理学者ではないということになりかねない。これらの分野を日本に紹介した加藤尚武自身がこういう言い方をしているので一概に著者を責めることはできないが、そんなところで先達を真似する必要はないのであって、カテゴリーミステイクに基づく問題設定はやはり避けるべきだろう。

わたしの理解が正しければわざと反論を誘発するような箇所を多くしてある本書に対し細かな批判を行うのは野暮というものであるが、入門書としての性格を考えるとちょっとまずいと思われる部分もあるので、以下、各章ごとに指摘していこう。

第一章では、著者は、トムソンとトゥーリーの議論の紹介を軸にして中絶の是非について論じている。紹介そのものは丁寧で、両者について批判すべきポイントもきちんと押さえられているので、中絶をめぐる論争の出発点の紹介としてはなかなかよい出来になっている。ただ、論争全体の見取り図ということでいえば、紹介する立場が偏りすぎているきらいがある。受精卵の段階ですでに道徳的地位を持つという立場がどこまでがんばるかという検討や、妊娠3ヶ月あたりに線を引く立場が単なる常識論か根拠があるかという検討も（額面上の目的から言っても）ほしいところである。